

からの逃走」である。ひと口に「二
ート」といっても世界それぞれ差が
ある。「二ート」は英国で最初に発生
したが、英国は階層社会で、下層は
就学や職業訓練などでハンディを負
っている若者がいる。日本の場合、
社会的上昇の機会が与えられている
のに、若者たちが自主的にその機会
を放棄しているのである。

働くこと、仕事についての若者の
最大の不満は、「給料が安い」という
ことである。しかし、本質的にい
えば賃金というのは、労働者が作り出
した価値より低い。でなければ、利
潤もないし、配当も、研究開発も不
可能である。それとは別に、労働の
評価は、周囲の人びとによってなさ
れ、それには一定の時間が必要であ
る。

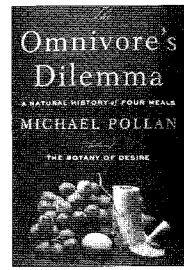
一方、消費においては、貨幣の提
出と商品の交付は同時で、本質的に
時間のない行為である。若いサラリ
ーマンが「迅速かつ適切な評価」を
望み、その速度が遅いことにいら立
つのは、労働を消費行動のスキーム
で捉え、時間を勘定に入れていない
からだ、と著者はいうのである。そ
して前述したように、賃金と労働と

は「等価交換」ではない。

「学ぶことの意味を知らない人間は、『他者と死者』（海鳥社）など、「思考
労働することの意味もわからない」。すると「何か？」を教えてください本
これが著者の結論である。

評者はこの著者のファンである。 これらも含め、一読を勧めたい
『寝ながら学べる構造主義』『私家（傍点は評者）

人間の食事が農業ばかりでなく 環境にも大きな影響を与える



◆ 海外の話題図書

『雑食動物のジレンマ』

マイケル・ポラン著（ペンギン社）

版・ユダヤ文化論』（共に文春新書、

るに違いない。

米国のホルモンや抗生物質を投与
したり、遺伝子を組み換えた農畜産
物はしばしば輸出相手国との貿易摩
擦の原因となってきた。アグリビジ
ネスはどのようにして、現在の不自
然な生産形態に至ったのか。様々な
ダイエットが次から次と流行り、低
カロリーの食品が並ぶ中、五人に三
人が肥満しているのはなぜか。

狂牛病発生以来、私は牛肉は避け
ている。米国の元農務省検査官やと
殺場職員などから、へたり牛を報告
すると、無視され、圧力がかかった
という話を聞いたことがあるからだ。
米国内での狂牛病発生率は公式数字
よりずっと多いと察する。何しろ毎
時間四〇〇頭が処理されるのだから、
日本が米国产牛肉輸入を再開した後
も危険部分等が何度も発見されてい
るのも不思議ではない。

時々、ハンバーガーやサラダから
〇一五七に感染し、死者が発生し
たというニュースで米国民はパニッ
ク状態に陥る。そんな中、米医学協
会の警告にもかかわらず、米食品医
薬局は牛の肺炎予防に抗生物質の投
薬を認める方針を明らかにした。同
局はまた、クローン牛の肉と牛乳が
食用に安全であるとの見解を示した。
普通の牛と違わないから、特別レベ
ルは不要だという。私はクローン牛
の肉も牛乳も遠慮したいのだが、こ
れでは区別しようがない。そもそも
普通牛のステーキを注文しなくても、
知らないうちにスープ等に紛れてい

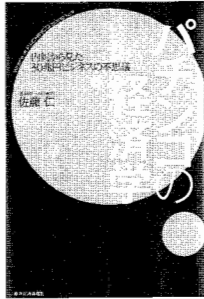
これを明らかにするのが、カリフ
オルニア大学ジャーナリズム学教授
マイケル・ポランの『雑食動物のジ
レンマ』だ。二〇〇六年四月出版以
来、今でもニューヨーク・タイムズ
のベストセラーリストに入っている。
同著の副題は「四つの食事の自然史
で、第一部はファーストフードやス
ーパー用のインダストリアル・ファ
ーミング、第二部は大手オーガニッ
ク産菜、そして零細オーガニック農
場、第三部は自ら狩猟、採取、栽培
した材料を使った食事を紹介してい
る。食事が農業ばかりか、環境に大
きく影響することを指摘する。
まず大量生産の食事。スーパーに
並ぶ四万五〇〇〇の製品のうち、四
分の一以上にコーンが含まれている。



『流通革命の真実』

渥美俊一著 ダイヤモンド社 (本体1,800円+税)

流通業界のトップ企業はなぜ短期間で数兆円規模まで成長できたのか。その陰には、約800社の流通企業を指導するカリスマ・コンサルタントの存在があった。カリスマが明かす知られざる「流通革命」の真実と直面する経営課題解決に迫る。



『パチンコの経済学』

佐藤仁著 東洋経済新報社 (本体1,500円+税)

業界規模30兆円の巨大産業でありながらマトモな産業統計すらないパチンコ業界。知られざるパチンコホールの内側と忍び寄る業界の危機。換金合法化からカジノ解禁へ進もうとする業界に何が起きているのか。内部にいた者しか書けない内幕。



『キミがこの本を買ったワケ』

指南役著 扶桑社 (本体1,300円+税)

ヒトがモノを買う仕組みは実は、あやふやである。たとえば、さっきコンビニで買ったもの。その理由を説明できるだろうか。広告会社の社員も、マーケティングの専門家も、脳科学者もわかっていない「買う理由」を解明したビジネス書。



『ヤマト王朝』

スターリング・シーグレイヴ他著
「ヤマト王朝」刊行委員会訳 展覧社 (本体2,800円+税)

日本の近代史をたどり天皇と政治家や実業家、官僚等の関係を明らかにする。同時に、太平洋戦争で政府、軍部がアジア各地で行ったされる略奪と隠匿された戦利品の存在を告発。肩肘張らずに読める歴史読み物。

コーンを主食とするメキシコ人より、米国人の体はコーンでできているのだ。政府助成金により、一九八〇年代には様々な農産物を栽培していた農場は、コーンに専念するようになってきた。採算は合わない。カーギルとADMが全米のコーンの三分の一を買い上げている。

コーンの六〇割が家畜の餌で、その大半が一億頭の牛用だ。なぜかという放牧牛がと殺体重一〇〇〇ポンドに達するのに二、三年かかるが、コーンが餌の牛は胸焼け、下痢、胃

潰瘍に悩まされ、最低一五割、恐らく七〇割に肝臓障害があるという。大量生産で牛肉は安くなり、三人に一人が毎日ファーストフードを食べている。しかしハンバーガー、コーン・シロップで味付けされたソフトドリンクを食す米国人に肥満が増え、医療コストは年間九〇〇億だ。さて、オーガニック産業はどうか。私も愛用しているホールフーズなどのオーガニック・スーパーは価格が通常のスーパーのほぼ倍だが、この

一〇年あまりで急増し、今や一〇億産業だ。オーガニックという開放牧されている家畜を思い浮かべるが、実はインダストリアル・ファームとあまり変わらないことをこの本で知った。これでは詐欺ではないか。週末にたつ個人オーガニック農家の市をもっと利用しよう。ホールフーズより更に割高だが、夏、熟してからもがれたトマトは不恰好でもちゃんとトマトの味がする。

池原麻里子・在ワシントン